

現地を訪問して想うこと

辻 輝也（1991年文学部）

6月に宮城と岩手の津波の被災地をレンタカーで訪問させて頂いたのに続き、今回校友会のご縁を頂き福島の被災地を訪問させて頂くことが出来た。津波の被害と放射能の被害、同じ地震がもたらした災害とはいえ、これらは全く異質で3年半経った復興の様相も全く違ったものであった。津波はその大きなエネルギーで町並みを一変させた。悲しいことに多くの命も奪った。一方で放射能はというと自然や街並みに何ら変化を加えることなく、また直接的に人の命を奪うことなく人々の生活をずたずたにした。

福島第一原発から30km圏内にあり、10ヶ月以上全村避難を余儀なくされた川内村を訪問し遠藤村長のお話を聞かせて頂いた。純真な子供が村長にしたためた「村に帰りたい」という手紙に突き動かされ熱い思いで帰村政策を推し進める村長。一方で高齢化や避難先での生活の変化、帰村後の仕事のことなど問題は山積しており、村民のふるさとへの思いだけでは帰村はスムーズに進まないとのことであった。そんな中、川内村に工場を建設し雇用を創出しようという会社も出て来ており、そのうちの1社が青年会議所を通じての友人、岩本社長のコードモエナジーであったことも今回のツアーで頂いたご縁であった。

ツアー2日目に訪れた五色沼自然探勝路のそれはそれは美しかったこと。しっかり勉強し、人と触れ、美味しい酒を飲み、美しい景色を鑑賞する。2日間にぎっしりと魅力をちりばめた素晴らしいツアーだった。復興を応援することは現地を訪れ、様々なことを知り語り、そして、人に伝えて巻き込んで行くことだと納得した。事務局の皆さん、そして終始思いやり溢れるご対応を頂いた現地福島の校友の皆さんに感謝申し上げます。